

氏名	山根 明大
学位の種類	博士(文学)
報告番号	甲第410号
学位授与年月日	2015年9月19日
学位授与の要件	学位規則(昭和28年4月1日 文部省令第9号) 第4条第1項該当
学位論文題目	エリザベス1世期の政治的 イングランド意識の成長— イングランドにおける「 コモンウェルス」概念の 社会的広がりを中心に—
審査委員	(主査) 青木 康 松原 宏之 小泉 徹 (聖心女子大学 文学部教授)

I. 論文の内容の要旨

論文題目： エリザベス1世期の政治的イングランド意識の成長

—イングランドにおける「コモンウェルス」概念の社会的広がりを中心に—

(1) 論文の構成

序章 初期近代の政治的イングランド意識

- (1) エルトンの「近代」国家論
- (2) 従来の「リパブリカニズム」研究とその問題点
- (3) 「イングランド人意識」という議論の射程
- (4) 本稿における視座：政治的イングランド意識と「コモンウェルス」

第1章 政治的イングランド意識の思想的要素：テューダー朝の「コモンウェルス」概念

第1節 古典的ヒューマニズムの政治言説

- (1) テューダー・ヒューマニズムの展開
- (2) 「レス・プブリカ」と「コモンウェルス」の汎ヨーロッパ性
- (3) 普遍的な理想国家「コモンウェルス」と「活動的生活」

第2節 プロテスタンティズムの政治言説

- (1) プロテスタンティズムと古典的ヒューマニズムの親和性
- (2) 「宗教的政治」論の登場と「クリスチャン・コモンウェルス」

第3節 コモン・ローの政治言説

- (1) ルネサンス期のコモン・ローを巡る学説史
- (2) コモン・ローの「慣習」・「理性」と「コモンウェルス」

小括

第2章 政治的イングランド意識の形成（1558～70年頃）：臣民の服従と宮廷のプロテスタント人文主義者の政治的イングランド意識

第1節 イングランド意識と国教会・王権への臣民の服従

- (1) 『説教集』における反ローマ・カトリック
- (2) ジョン・ジュウェルと国教会の「改革」
- (3) 『為政者の鑑』におけるイングランド史解釈
- (4) 小括

第2節 宮廷のプロテスタント人文主義者の政治的イングランド意識

- (1) エリザベス治世前期のプロテスタント人文主義者と「ケンブリッジ・サークル」
- (2) ニコラス・ベイコンの政治的イングランド意識
- (3) トマス・スミスの政治的イングランド意識
- (4) 小括

第3章 政治的イングランド意識の発展（1570、80年代）：宮廷外の政治的領域への普及

第1節 下院議員の政治的イングランド意識

- (1) 議会史研究の成果とエリザベス期の議員の政治意識について
- (2) ピーター・ウェントワースの議会における「言論の自由」
- (3) ジョン・フッカーの「下院の優越」と重層的アイデンティティー
- (4) 小括

第2節 地方都市における政治的イングランド意識

- (1) 地方史研究の進展とジョン・バーストンの『社会の保全』
- (2) 「コモンウェルス」と「自由」
- (3) 「コモンウェルス」と「徳」
- (4) 地方都市の統治への政治的イングランド意識の適用
- (5) 小括

第3節 「公共圏」における政治的イングランド意識

- (1) テューダー朝の「公共圏」とジョン・スタップズの『亡国論』
- (2) 『亡国論』におけるエリザベスの結婚問題
- (3) 『亡国論』における「助言」と「クリスチャン・コモンウェルスメン」
- (4) 国王布告（1579年9月27日）による『亡国論』批判
- (5) 小括

第4章 政治的イングランド意識の急進化（1590年頃～1603年）：権力批判への転化

第1節 タキトゥス主義者の政治的イングランド意識

- (1) タキトゥス主義の受容と「エセックス・サークル」
- (2) ジョン・ヘイワードの『ヘンリ4世史』における王権批判
- (3) 『ヘンリ4世史』に対するフランシス・ベイコンの評価
- (4) 小括
- (付論①) 『リチャード2世の生涯と死』における王権批判

第2節 コモン・ローヤーの政治的イングランド意識

- (1) エリザベス期の法学院について
- (2) ウィリアム・フルベックの反王権的コモン・ロー理論
- (3) 小括
- (付論②) 祝宴に見られる法学院の反王権的メンタリティ

第3節 ピューリタンの政治的イングランド意識

- (1) エリザベス期のピューリタニズムと「マープレリト書簡」
- (2) 「マープレリト書簡」における国教会批判
- (3) 「マープレリト書簡」の反響と国教会側の反撃
- (4) 小括

結び

<参考文献リスト>

(2) 論文の内容要旨

16世紀の政治的イングランド意識の発展を検討する本論文では、まず、序章・第1章が、リパブリカニズム、プロテスタンティズム、コモン・ローといった政治的イングランド意識形成の諸要因について概観する。それを受けて、1558年から1570年頃を扱う第2章では、ニコラス・ベイコン、トマス・スミスなどの廷臣による議論から、イングランドの政治に臣民が参加するという意識の形成を確認する。続く第3章は、1570年代から80年代の政治意識の社会的広がり、下院議員ピーター・ウェントワースとジョン・フッカー、地方都市チュークスベリィの市政にかかわったジョン・バーストン、公職に就いていない法曹ジョン・スタップズといった人びとの著作・言動から確認する。本論部分の最後にあたる第4章は、1590年頃から1603年にいたるエリザベス治世後期に、社会的な広がりをすでにえていた政治的イングランド意識が、タキトウス主義の受容、コモン・ロー改革の主張、ピューリタンの改革論といった急進的思想動向においても思考の枠組みを提供したことを、具体的事例をとおして明らかにする。そして、最後の「結び」では、以上の3つの章の議論を受けて、エリザベス1世期の政治的イングランド意識の成長の過程があらためて整理される。

Ⅱ．論文審査の結果の要旨

(1) 論文の特徴

近世イングランドの政治思想史の研究においては、国制に根本的変革が生じた17世紀が重視されてきた一方で、16世紀は相対的に軽視される傾向が見られた。しかし、16世紀における展開—古典的人文主義の潮流とともにもたらされたリパブリカニズムが、イングランド的なコモンウェルス論の形をとり、プロテスタント主義やコモン・ローの考え方と結びついて、同世紀末までには政治的イングランド意識を質量両面においてはっきりと発展させたという歴史的な過程—は、きわめて重要であった。本論文の実証作業の中心をなす第2、3、4章で、関連研究の新知見も考慮にいれつつ、16世紀イングランド人の政治思想・政治意識を示す同時代著作等を渉猟・検討することにより、エリザベス1世治世の前、中、後期の政治的イングランド意識の段階的な発展を具体的にたどろうとしているのは、本論文のもっとも特徴的な点である。

(2) 論文の評価

テューダー朝は近代国家の基礎がすえられた時代とする見方がある一方で、政治思想・政治意識の研究では16世紀は17世紀の革命の陰にかくれた存在であった。そこで、本論文が、法、宗教など隣接領域の著作にも目を配りつつ、同時代の政治的著作を渉猟し、従来の研究には見られない多様な事例の積重ねによって、エリザベス治世の政治的イングランド意識に関する信頼にたる概観を提供したことは、重要な学術的貢献である。政治的イングランド意識の発展を十全に立証するには、個々の著作の内容の検討とともに、例えば著作の発行部数の変化をはじめ、その社会的広がりを示す、より客観的な指標の提示がさらに求められるところであり、本論文はそうした面に弱さがあることは否めないが、豊富な具体的史実の紹介をつうじて、政治的イングランド意識の成長という重要な歴史事象の詳細な見取り図を示しえた点は積極的に評価されるべきである。